

<b>Title</b>	「リルストンの白鹿」についての一考察
<b>Author</b>	平井, 政忠
<b>Citation</b>	人文研究. 15 卷 3 号, p.249-263.
<b>Issue Date</b>	1964
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 「リルストンの白鹿」についての一考察

平 井 政 忠

ワーズワスの物語詩 *The White Doe of Rylstone; or, The Fate of the Nortons* (「リルストンの白鹿——ノートン家の運命」) は年代的に言って、このまえに本誌で拙論を試みた *Immortality Ode* のちに書かれたもので、*Immortality Ode* は一八〇二年から一八〇四年にかけて、*The White Doe* は、それから三年後の一八〇七年から翌年にかけて作られたものである (出版は一八一五年)。勿論そのあいだには幾多のすぐれたソネットをはじめ、*Resolution and Independence*, *Ode to Duty*, *The Simpton Pass*, *I wandered lonely as a cloud*, *The Solitary Reaper*, *Character of the Happy Warrior*, *Elegiac Stanzas* など詩人ワーズワスの思想的発展を考へる場合それぞれに重要な意義をもつ佳作がものされ、また大作 *The Prelude* *The Excursion* とはこのあいだも書き続けられていたのである。詩人、わけてもローマン詩人の思想の発展というものが直線的に行なわれるものではなく一進一退、ときとして四分五裂、あるいは低徊低迷の状を呈するもので、それを単純に四季のうつり変りのごとくに考へて——それすら必ずしも直線的ではないが——直線的に眺めようとするのが抑も不自然なことであるが、そういうことから考へても、重点的にピックアップしてみることは詩人の思想発展の大綱を知る上に必要であり、*Immortality Ode* の次にこの詩を置いて考へてみることは不自然な飛躍ではなく、そうすることによってこの詩人の *natural piety* から *Christian piety* への思想的発展の山なみの稜線を巨視的に把握することができると思ふ。

「リルストンの白鹿」は英本国でも従来あまり親しまれていない。Lyrical Ballads の場合を別として、詩人は大抵いつも自作の出版をためらいがちであった。同時代人に真の理解者を得ることをあまり期待できなかったからである。

He (i. e. W. W.) has no pleasure in publishing——he even detests it——and if it were not that he is not over wealthy, he would leave all his works to be published after his Death. William himself is sure that the *White Doe* will not sell or be admired except by a very few at first; therefore though he once was inclined to publish it, he is very averse to it now and only yields to Mary's entreaties and mine. (D. W. to Jane Marshall, May 11, 1808.)

とりわけ一八〇七年出版の *Poems* の不評は彼はこの詩の出版をしぶらせたのである。ハーパーは一九二九年名著 *William Wordsworth* の “That beautiful poem, ‘The White Doe of Rylstone,’ has rarely been understood” (*Op. cit.*, vol. II, p. 472.) 以下 Peter Burra は一九三六年 *Wordsworth* の “The *White Doe of Rylstone* is Wordsworth's most flawless achievement as an artist, and stands high among the finest narrative poems in the language. Yet none of his poems has been more unduly neglected.” (*Op. cit.*, p. 128, 1950 ed.) と絶讃を惜しまない。ド・セリンコートも一九四六年全集の註でこの詩を高く評価した。“Yet whatever the verdict on the poem (i. e. *The White Doe*) as a whole, none can question the loftiness of its imaginative conception, or that it enshrines some of W.'s most exquisite writing.” (Ed. De Selincourt: *Wordsworth's Poetical Works*, vol. III, p. 548.) 一九六二年ハーパー記念論文集の Oscar James Campbell の *Wordsworth's Conception of the Aesthetic Experience* (*Wordsworth and Coleridge; Studies in Honour of George McLean Harper*, ed. by E. L. Griggs.) もこの作品を可成り重く見ている。

しかしこの詩をほめぬ者もいる。コールリッジはそれほどでもなかったが、ラムやハズリットに到っては全く否定的で、詩人は、ラムには想像力が欠除している、とまで言って憤慨した。(Cf. W. W. to S. T. Coleridge, Apr. 19, 1808.) 尤もこれら同時代人のは、最初の原稿を読んだの批判であって、その後補正を加えられた一八一五年出版の同詩に関する

彼等の意見はそれを知ることができない。新しいところでは *The Egotistical Sublime* (1954) の John Jones がある。しかし彼も "Except for *The Excursion*, it is the most ambitious work of Wordsworth's later life." (Cf. *Op. cit.*, pp. 144-57.) へいには認めている。詩人自身はこの詩を、"in conception, the highest work I had ever produced" (Ed. De Selincourt: *Op. cit.*, vol. III, p. 548) と自負したが、その自負が正当に評価されるには可成りの年月を要したというわけである。この詩はその審美的価値からしても彼の詩として出色のものであるが、*Immortality Ode* 後における詩人の思想の方向を知る上に於て見のがすことのできない中篇詩である。全体で七カントー、行数にして二千行近く、コールリッジの「クリスタベル」(第一部は一七九七年、第二部は一八〇一年に書かれ、出版は一八一六年、但しワーズワスは早くからこの詩の原稿を読んでいた)、スコットの「最後の吟遊詩人の歌」(一八〇五年出版) と類似の韻律で書かれた、すなわちカプレットの *irregular stanza* と各行四アクセントという点では同じであるが、これら二つの詩の古めかしい、それがために却って新奇な、*sprung rhythm* に対し、ワーズワスのは従来一般に行なわれてきている *running rhythm* である。内容の点から見てもこれら三つの詩には共通した面が多いが、詩形の点から考えても彼がこれら二つの物語詩を意識してこれを書いたことは明らかである。コールリッジはこの詩が他の二つの模倣と見られはせぬかと心配した。

恐らく、「クリスタベル」の幻想美と、「最後の吟遊詩人の歌」の中世ロマンス的興趣と、彼独自の思想の三つを一つに兼ねあわせようとならったのであろう。しかしさすがに *sprung rhythm* にまではふみ切らなかつた。*Lyrical Ballads* 緒言の詩論から考えてもそれはできないはずである。彼の詩論と作品とは必ずしも一致せぬ場合もあるが、緒言の中で、詩の用語や題材に関して極めて革新的であった彼がこと詩形に関しては全く伝統踏襲で、伝統尊重というよりもむしろ伝統利用の立場にあることをはっきりと述べている。(Cf. *Preface*, pp. 30-32, in *The Lyrical Ballads, 1798-1805*, ed. by George Sampson.)

詩の梗概は次の通りである。ポールトンの古びた修道院の鐘の音が力強く楽しげに鳴りひびき、はれ着をつけた村人た

ちが谷間を通り、荒地をぬけて三々五々集まってくる。曾ては宏壯を誇った堂塔も僧院解体のために今は荒れはてたが、鐘楼の鐘のみはその昔、ミサなどの壮嚴な祭礼に村人を呼び集めたころと変らぬ力強いひびきをもって、老若男女を、これも危うく難を免れた礼拝堂に呼び集め、そこで村人たちは神の栄光を讃え安息日の祈りをささげる。さきほどまで人々であふれていた境内もいつのまにか人影消えて、礼拝堂の中からは一つ歎びにあふれた讚美歌の合唱が高らかに聞こえてくる。ときはまさに、大いなる処女王朝の淨き信仰の日の出のときであった。讚美歌がやみ、ひとりの僧侶がしずかに祈禱書を誦しはじめたが、その声もほとんどは聞こえず、聞こえるのは、近くを流れるウォーフ河のせせらぎの音だけ。そのとき、うす暗い木立の蔭から一頭の白鹿があらわれ、夢のようにしずかに境内をめくり歩いて、最後に一つの墓にそつとより添うように身を横たえた。しばらくしてお堂の中からはふたたび讚美歌が湧き起り、それを別れの歌として会衆は家路を急いで散り別れた。だが、なかには、その白鹿が神妙にうずくまって安息日の勤めを行なっているのを、じつと見守っている一群もあった。ひとりの母親は小さい息子にむかって、「坊やほれごらん、居るでしょう、あれが有名な白鹿よ、リルストンから山を越えて安息日のお詣りにくるのよ、みんなが行ってしまったからあの鹿も帰るのよ、もう何年ものあいだ、降っても照ってもかならず安息日にはお詣りにくるのよ」と言い聞かせるのであった。

話はさかのぼって一五六九年、エリザ朝十二年目の年、かねてから女王の新しい宗教政策をあきたらず思っていた北部イングランドは、パーシト、ネヴィル両伯のもとに、旧教復興の反旗をひるがえした。(世にいわれる *The Rising of the North* はこれである。) これよりさき、郷士リチャード・ノートンも彼等と志を同じくし、ひとり娘のエミリーに命じて、キリストの五つの傷をあらわした十字架の模様をぬいとらせた軍旗まで用意して、ときの到るを待っていた。そこへいよいよ召集の命令がきた。エミリーのほかに彼には九人の屈強の息子たちがいたが、長男のフランスのみは年老いた父のこの拳に反対し、「公正にして仁慈に富む女王を戴き、淨らかな信仰に恵まれているのに、無謀なまねをしてはなりません、呼び集めた兵は解散し、罪なことはやめて家でどうぞ平和に暮らして頂きたい、弟たちのため、また私自身のため、

わけてもエミリーのために。』そう言って父の謀叛を思いとどまらせようと懇願に努めた。リチャードはしかし息子の言に耳をもかさず、次男に軍旗を守らせて、父子九名は出かけて行った。一方各自武装して馬にまたがった居民からなる軍勢は歓呼して彼等の出陣を迎えた。しばらく喪神状態にあったフランシスは、裏門にさまよい出て、そこで郷土の軍勢の歓呼の声をかすかに聞いた。気がついて見れば手には一本の槍をにぎっている。今は、絶望も悲しみも消えていた。見ると水松の木かげにエミリーが、頭をひぎにうつぶせて坐っている。そばに行つて彼はこう言った。「みんな行つてしまつた、道をふみまちがえたとはいへ、勇ましく——ただいっときだけ一緒にいてあげよう——父上はかねてパーシー伯と固い約束を結んでおられた。しかしただそればかりではない。何かもつと強い力が父上を動かしているのだ。しかし、ぼくは長子と第二の父たるの名に於て彼等の侮蔑と憐憫と敢えて戦つた。神の力を頼みながら父上の前にひざまづいてお願いしたので。マーマデュークだけは心の中で折れたようだった、彼は父上のひとにらみさえなかつたら志をひるがえしていたかもしれない。神よわれわれ一同の罪をおゆるしてください——とりわけ愛しい妹の罪を。慈しみ深い父上の見ている前で、あの不浄な軍旗が縫取られていったとき、お前が、溜息をこらえ、涙をかくし、柔和な親思いの微笑をたたえつづけたその苦しみは天の記録に書き留められているのだ。お前はお前の苦しい役目を果した、もうそれで何もいうことはない。ぼくは、お前よりはずっと易しい仕事だが、これからやらなくちゃならない。ぼくは彼等の目的に加勢することは絶対にできないが、彼等のそばに一緒に居ようと思う。よろいもつけず素手で、彼等と禍福を共にするんだ。』そう言つてフランシスは手にしていた槍を、それが彼と、彼の魂が願うところの愛の純粹な意図 (the pure intent Of Love) のあいだに立つて邪魔をするものであるかのように投げ捨てて足で蹴とばしてしまつた。彼は妹に向かつてことばを続けた。「ぼくたちの愛したすべてのものにとむらいの鐘の鳴る日がやってきたのだ。希望とはいっさいおさらばだ、あれやこれやのために祈ることももうやめるのだ、われわれは全部亡びるのだ。慰さめになるなら泣くもよい、しかし誰の助けも頼んではならない。お前の運命をそのままに受けいれ、一時のがれなんかをしないでひたすら耐えぬいて行くだ。われわれ

も、それからわれわれのものいっさい——この館も、気持ちよい木蔭も、路も、四阿も、なにもかも亡びてしまうのだ。何もかも失なわれるのだ。あの鹿だってそうだ。そう言って彼は数歩はなれたところで、さまよいながら草をはんでいる雪のように白い牝鹿をゆびさした。「あの鹿だって前に住んでいた平和な森に帰って行ってしまいうだろう。だが、妹よ、お前は、木枯らしに吹きあらされた木の枝に残る最後の一片だ。これまでわれわれ二人で共に歩んできた浄き信仰に生き抜いて、くじけず、神の恩寵にふさわしく、お前の運命づけられた勤めをはたし、気高い悲哀の力によって、乱されることのない人間性のいとも清らかな空高く高められた霊となっておくれ。」そう言いのことして別れの接吻をすると、フランシスは郷軍のあとを追ってひとりで出かけて行った。

ノートンの一隊の到着をパーシー、ネヴィル両伯は大いに喜び迎え、ノートンは両伯の前に八人の息子を誇るが、あとに残してきた可憐な娘のことをいうときその声はしめった。がしかし彼は声をはげまして、時は熟した、今こそ起つべきときだ、と呼びかける。そして彼が誇らしく掲げ示す十字架の模様の軍旗を並みいる将兵は仰ぎ見て、この旗と生死を共にしようと呼ぶ。その言葉を受けてノートンは、その声こそ聖徒たちへの彼等の祈りであり、それは人知れぬ幾万の人々の溜息の声なのだという。ノーサンバランド伯パーシーは、その旗を高く掲げよと命ずる。そこでその高く掲げられた、恐ろしい紋章をつけた軍旗を仰いで声の一つに歓呼の聲がわき起り、その声はウェア河をくだり、古いダラムの町にこたまし、聖カスバートの塔をゆるがした。

かくて北部イングランドは今や、トゥィード河からタイン河にかけてパーシーの号令のもとと武装は整のい、ネヴィルの召集令にこたえて、ティーズ河、ウェア河、その他あまたの河のほとりから七百の騎士がレイビーの館に参集した。そして両伯共同命令のもとにまずダラムに進み、聖カスバートの古い教会でミサを唱え、祈祷書を破り、聖書を足で踏みにじった。それから南下してウェザビーに着いたときには、北部イングランドの精兵一万六千を点呼した。しかし、その風采に於ても、その技倆の点に於ても、あの八人の息子の右に出づるものではなく、彼等は父の捧げ持つ軍旗を守って父のそば

を離れなかった。老人のかくしゃくたるさまをひとり群を離れて、遠くから見守っている男がいた。よろいもつけず、素手の姿は大胆不敵というほかはなかったが、目に愛いの色をたたえて、守護神のごとくに立っていた。

いよいよ叛乱軍はロンドンに向かつて進軍をはじめた。一方すでに北部鎮庄の官軍が進発していた。ウォリック伯ダドレイに率いられてその大軍は五日後にはヨークに到着するはずであった。官軍進撃の迅速機敏さに両伯、特に小さなネヴィルは色を失なった。両伯はまずティーズ河まで退いて、そこを拠点として、北方からの援軍を待つことにした。退却の命令はくんだり、ラッパは鳴りわたった。ノートンは両伯の意気地なさをしきりにくやしがり、十字架の軍旗をじっと仰ぎ見た。そしてそのとき今まで感じたことのない意気銷沈を彼は感じた。同時に急に娘のことが思い出され、こんなことを考えるのであった。——どうしてあの子の顔は神聖な愛と柔和な光に輝きわたっていたのだろう。あの子の信仰は父の私とは別の方に傾いていたのだ。娘と、更にもっとやくざなあの子の卑怯者の俸のためにわれわれは駄目にされてしまったのだ。エミリーを心変りさせたのはあのフランシスだ。そしてまたそのフランシスを征服したのは、今はすでに墓にねむる彼等の母親だったのだ。ああ、この不幸の源をさぐるためには、遠い遠い過去にまでさかのぼらねばならぬ。——急ぎ退却する軍のしんがりを行きながらノートンは胸をさかれる物思いに沈んだ。そのときフランシスは父の前に立ち現われて、勇気のない隊長たちから去って一時避難の場所に身を隠すようにすすめるが、反対に父から卑怯者と罵られ、また好い時機を待ってその場をおとなく引き下がる。

場面は変って、叛乱軍は、彼等を裏切ったサー・ジョージ・ボウズをバーナード城に攻めることになる。雲なき空に月さえて、身方の陣営や、彼等に包囲された町や、ティーズ河の岸にそびえるバーナード城などを静かに月の光は照らしている。遠く南の方にはリルストーン・ホールがぼつんと浮かんで見える。向うの塔の大時計の針は九時をさしている。悲しみと苦しみと恐れがここに手を拡げていようとは思われぬ静かな夜である。とびかう羽虫が池の面に描く無数の波紋が月影をあびて消えては現れ消えては現れしている。そこからほど遠からぬところに例の白鹿がうずくまっています、そこへ



ミリーも木蔭から月の光の中に姿を現わした。ふくいくと香る花々の薫りに幼き日の思い出——まだ片言しか言えなかった頑是ない身に、目に見えぬ神を崇め、改革されて浄められた信仰 (The faith reformed and purified) に、今は亡き母によって導かれた思い出がよみがえってくるのであった。エミリーは兄フランシスのことを思って、「お母様の愛の精霊の天使よ、どうぞフランシス兄さんにくだって、

*'If hope be a rejected stay,*

*Of that most lamentable snare,*

*Do thou, my christian Son, beware*

*The self-reliance of despair!'* (ll. 1053-6.)

と書いてあげて下さい」と祈った。

しかし、そのままじっとしていられなくなって彼女は、出かけて父を引きとめようと思いかけるが、兄が出がけに言い出した厳しい戒めを思い出す。彼女のつとめはただ立ちて待つこと、何もかもあきらめて打撃に堪え、苦悩と悲哀を超えて、けがれない大勝利を獲得することであった。

*Her duty is to stand and wait;*

*In resignation to abide*

*The shock, and finally secure*

*O'er pain and grief a triumph pure.* (ll. 1069-72.)

そういう勤めを自覚することによって彼女の苦悩はしずまった。そのときすでにノートン父子は他の者たちと共にバーナード城の地下牢に捕われの身となり、友軍は城をめがけて必死の攻撃を続けた。しかし月の沈む前に、すでに、合戦の場にふみとどまる身方の兵は一人もいなかった。

かくてノートン父子はヨークのまちに引かれて行き、フランシスだけは罪に問われず、他は皆そこで処刑されてしまった。その間フランシスは終始彼等を慰めはげまし、父の最後の願いとして十字架の軍旗をポールトン修道院に持ち帰り、

聖母マリアの聖堂に掲げることを引き受けてひた走りに馳け去るが、その彼もあと僅かというところで敵の追撃にあい、終に軍旗を血に染めて果てる。三日目にノートンの領地内に住む男が野ざらしの屍体を見つけ、エミリーには知らせずに、僧侶の同意を得て修道院の墓地にこっそりと埋葬しようとするが、偶然彼女に見つかり、エミリーは兄の墓上に倒れふした。

今はリルストーン・ホールをはじめ何もかも荒れはてた荒廢の莊園を、エミリーは唯だひとり昼夜の別なくひとひらの枯葉のごとく遠くまでさまよい歩くのであった。しかしあるときあの白鹿がひょっこり現われてエミリーはこの再会に泣き、以後この無二の慰め手を得て、しだいに心の平安を取りもどし、今ははや、亡きはらからを思つて涙を流すこともなくなり、ときおり彼女が涙をこぼすのは、この生き残った最後の友に泣くだけであつた。世間との交りは絶つたが、助けを必要とする者には援助を惜しまず、谷間の住人たちの祈りには一緒になつて祈つた。そうしてついに彼女もこの地上を去つて、修道院の墓地に母と並んで葬むられた。白鹿はエミリーの愛するものすべてを愛したが、とりわけこの墓地を好み、安息日にはかならず彼女の墓に姿を見せた。荒れ果れたリルストーン・ホールも白鹿にはやさしいほほえみをなげかけて、こう呼びかけているようだ――

“Thou, thou art not a Child of Time,

But Daughter of the Eternal Prime!” (ll. 1909 f.)

ボールトン修道院の鐘の音にはじまり、一家のうち唯だひとり生き残つた乙女エミリーの死をもつて終るこの物語詩は、祇園精舎の鐘の声にはじまり、女院御往生をもつて終る平家物語をわが国の読者には思い出させるかも知れない。さしづめノートンは平相国、フランシスは重盛、エミリーは、平家一門滅亡のち大原の里にこもる建礼門院といったところである。これを偶然の一致と驚くよりも、人間世界の通有性の一端と考えるべきかもしれぬ。但しエミリーだけは、詩人が種本とした「パーシー古謡集」の *The Rising of the North* 及びそのはじめに附けられた史実にも、また、Dr. Whit-

aker: *The History and Antiquities of the Deanery of Craven* の白鹿伝説にもない、作者の創意である。それだけに意義深い存在でもある。二つの物語詩はそうした共通の面と同時に異なった面をも有する。共に劈頭にうち鳴らされる鐘ながら、祇園精舎の鐘の声の伝えるのは諸行無常のひびきであり、ボールトン修道院のそれは晴れた日の野山を馳けて静朗な悦びをふりまく朗々のひびきである。

From Bolton's old monastic tower

The bells ring loud with gladsome power;

The sun shines bright ... (ll. 1-3)

筆者は本稿で基仏比較論を試みる意図は毛頭ないことをことわっておかねばならない。そこで、二つの鐘の音は両物語の根本的相違——一方は寂滅為樂の否定的ムード、他は苦悩を越えてほのぼのと立ちのぼる肯定的ムード——をはじめから打ち鳴らしているといえる。それと同時にワーズワスのこの詩の随所に於て、諸行無常的ひびきは冒頭に打ち鳴らされた明るい鐘の音を消しかねぬくらい陰鬱にたゆとうのを読者は感じぬわけにはいかない。 *Lyrical Ballads* & *The Prelude* ——特にその前半の——あの感激にみちた爽やかさはここでは既に遠い過去の感である。

この詩で詩人は何を語り何を言わんとしているのだろうか。それを解くには、当然のことながら、この詩のはじめに掲げられた、妻メアリへの *Dedication* と、彼の唯だ一つの劇 *The Borderers* からの引用の一節に付け加えをしたものと、更にフランシス・ベイコンの *The Essays* の “Of Atheism” からの引用の二つがその重要な鍵をなす。結論を先にいうなら、この三者と、この物語詩とをにらみ合わせて見ることによって我々はそこに「苦悩とその克服」という一つのテーマをさぐりあてる。そしてこのテーマをめぐる、物質に対する精神の優位、人間のなすもろものわざそのものの無益とはかなさ、唯だ人間の魂と自然と神の平安のみが永遠に変わらぬ価値を有するとの諸行無常の思想が流れつづける。これはしかし妙なことではある。一つの詩が、それに付けられた幾つかの題辞によらなければその真の意味を十分に解明できない

とすれば、その詩は芸術としての完成度を疑われることになるのであって、バーナード・ショーの戯曲のあの長たらしいト書を読むとき、読者は彼が誹るシェイクスピアの芸術の高さを一層強く感じさせられるのが落ちであるが、そうでもしなければ自作を十分に理解して貰えぬと案じた先駆者的老婆心は両者同じであつたろう。ワーズワスの題辞も、なければなしで一向にさし支えないものであることは詩人のために一言弁じておきたい。

詩人の伝記は知らずとも、常人よりも感受性の鋭い詩人が、世の常の、あるいは世の常ならぬ悲哀苦惱を人一倍強く感じたであろうことは想像に難くない。黄水仙の花と一しよに陽気に躍る詩人の心は、またしばしば“vacant or pensive mood”に閉ぢられる憂愁の魂でもあつた。Dedication はこう歌っている。

..... in the bosom of our rustic Cell

We by a lamentable change were taught

that "bliss with mortal Man may not abide :"

How nearly joy and sorrow are allied ! (ll. 21-24.)

更にこう続けていふ。

— But, as soft gales dissolve the dreary snow,

And give the timid herbage leave to shoot,

Heaven's breathing influence failed not to bestow

A timely promise of unlooked-for fruit,

Fair fruit of pleasure and serene content

From blossoms wild of fancies innocent. (ll. 27-32.)

これは、人間の運命に一喜一憂することをやめて、それよりも神の恩寵の力によって、とりとめもないものではあるが我

々の素朴な物思いの中から思いもかけず悦び、静かな満足、神の平安が生まれる、それを心頼みせよ、との意味である。一八一五年及び一八二〇年版には三つの題辞のほかにもう一つソネットが題辞としてつけられていた。その後これは除かれた。その大意はこうである。

『人間の意志は弱いものであり、その判断は盲目も同然である。過去の思い出は心を苦しめ、未来への希望は裏切者だ。悲哀は深く、人間にとって悦びは束の間の命しかなく、却ってそれは悲しむべきものだ。』このように——単なる理性よりもより高い精神を有する人々の魂を高め、人生の暗澹たる暗雲をあげほの光彩をもって彩るべく任務づけられたあの栄光に輝く才能——精妙高邁なる想像力——を欠くところの輩は、限りある我々の生涯の運命を、このように描くであろう。凋むことなき信仰のアマランスの花を摘みとり、最もはげしい苦悩の雨にも耐え、最もするどい悲しみの風にもひるまぬ冠を編んで、悩める者のひたいを縛ってやるのが想像力の仕事だ。(Miscellaneous Sonnets, XXXV)

彼は *Preface of 1815* では “Fancy is given to quicken and to beguile the temporal part of our nature, Imagination to incite and to support the eternal.” と書いて fancy と imagination とを区別しているが、(11) では Dedication の fancy もソネットの imagination もほとんど区別されていない。要するに両詩とも人生苦悩の克服は精神によって解決すべき問題であることを強調するものである。裏をかえせば、それは acting の空しさということである。神の与える平安は、人間の acting そのものからくるのではなくして、acting に続く suffering からくるのである。それは *Immortality Ode* で、

…… the soothing thoughts that spring

Out of human suffering;

…… the faith that looks through death,

…… years that bring the philosophic mind. (ll. 184-7)

と歌ったものの延長発展である。

次に *The Borderers* から引用の一節に附け加えをしたものも苦悩とその克服のテーマを歌ったものである。

“Action is transitory—a step, a blow,

The motion of a muscle——this way or that——

’Tis done; and in the after-vacancy

We wonder at ourselves like men betrayed:

Suffering is permanent, obscure and dark,

And has the nature of infinity.

Yet through that darkness (infinite though it seem

And irremovable(*sic*)) gracious openings lie,

By which the soul——with patient steps of thought

Now toiling, wafted now on wings of prayer——

May pass in hope, and, though from mortal bonds

Yet undelivered, rise with sure ascent

Even to the fountain-head of peace divine.” (ll. 1539- )

ワールドとワーズワスとはいろいろな面から見て、対蹠的といってもよいくらい違うのであるが、ワールドの獄中記の中にはワーズワスの考えと非常に近似したものを発見する。それによってもワーズワスの苦悩に対する考え方が単なるドグマでなかったことを知るのである。獄中記の次の一節を読むだけでそのことは十分にわかる。

I have passed through every possible mood of suffering. Better than Wordsworth himself I know what Wordsworth meant when he said——

‘Suffering is permanent, obscure, and dark

And has the nature of infinity.’

(行為というものはあつという間のものである——足を一歩ふみ出したり、手で一打ちしたり、筋肉の運動にすぎない——あちへ動かしたり、こちへ動かしたり——そしてやってしまったてから、あとの空しさに於てわれわれは欺かれてもしたように自らをいぶかる。悩みは人知れずだからだと続くいんうつなもので、無限性をおびている。しかしながらその暗黒——それは果てしなく取り除くこともできないように見えるが——その暗黒にもありがたい抜け穴はあり、それを通して魂は、あるときは骨折って、あるときは祈りの翼にのって、思想の忍耐強い歩みをもって希望によみがえり、人間の束縛からはまだ解放されぬが、神より与えられる平安の泉の源までも確かな足どりで登ってゆくことができるのだ。)

But while there were times when I rejoiced in the idea that my sufferings were to be endless, I could not bear them to be without meaning. Now I find hidden somewhere away in my nature something that tells me that nothing in the whole world is meaningless, and suffering least of all. That something hidden away in my nature, like a treasure in a field, is Humility. (*De Profundis*, pp. 24-5. Methuen.)

両者の相違はストイックなワーズワスが苦悩——主として外からのもの（不幸、禍）であつたろうが、しかしアネット・ブロンとの青春の過ちのほか日常のことに於ても、道学者の一面のあるビュリタニックな詩人のことであるから恐らく悔恨の苦悩をなめることはあつたであらう——とそれに対する克服を自然愛と信仰とによって恒常的に処理しつつ一步一步向上を続けて行ったのに対し、官能的享樂に明け暮れたワイルドは彼の言うがごとく苦汁を一度期に固めていやというほど飲まされなければならなかつたの違ひである。

今、自然愛と信仰によつてと言つたが、その順序の通り、ワーズワスは常に自然愛の方がキリスト教信仰よりも影が濃いのであるが、（この前の *Immortality Ode* でもそうであつた）年と共に彼の思想の中心が自然から正統的信仰の神の方へと移行して行ったことは確かで、序詞の第三番目のベイコンからの引用はその現れの一つと見てよい。その要旨はこうである。「神を否定する者はすなわち人間の高貴性を破壊する者である。犬でも、自分よりもすぐれた性質のものである人間に支持されると知れば気高さと勇氣を示す。人間も神の守護と恩寵に安んじ頼るとき人間性では元來得ることのできない力と信念とを得られる」。彼の自然愛は彼の官能を通して得られたものだけに、自我中心的傾向を取り勝ちであるが（「人文研究」第4巻第4号拙論「ワーズワスのエゴティズム」参照）、神への信仰は彼の自己本位の内向的精神に眞の意味での外向性をもたらすことになる。しかしこの詩ではまだ彼の信仰は正統的と言ひ難いものではあるまいか。この詩の暗さを救っているのはエミリーのキリスト教信仰よりもむしろ時折の白鹿の出現である。執拗なほどにそのひかりかがやくばかりまっ白な清浄さがくり返し述べられ、その都度場面がパッと明るくなって（Cf. ll. 55-60; 100-3; 1646-7; 1738-42）

ほのぼのとしたものがただよう。ハーパーの言う神の平安ではなく (Cf. Harper: *Op. cit.*, vol. II, p. 472.)、ワーズワスの自然愛の情緒がにがい出るのである。白鹿は自然の象徴であり、詩人が創造したエミリーはもうひとりのルーシー、即ちワーズワスの汎神論的自然と一つに融け合つて完全に受動的な、或る理想的状況にあるところの、詩人が夢み描いている孤独な人間像で、彼はこれを女性のイメージで示すよりほかないことを感得していたのである。それは男性では現わせないもの、永遠に女性的なるものの一種と考えてよいであろう。そしてその受動性も神の御心のままにとりよりは、自然のなりゆきへの順応の方が強い。エミリーと白鹿の再会は、試練に耐えて勝ちぬいた——行動によって俗界に墮ちることなく、兄から命ぜられた完全な受動的態度、行動面に於けるばかりでなく、精神面に於てすら完全な受動的態度を維持し続けることによつて、即ち *acting* によつてではなく、*suffering* のプルガトリオを通して徐々に向上して行つて終に精神的勝利を勝ち得た——ワーズワスの汎神論的自然の愛児が再びその愛情深くけがれない自然との融合に帰ることを半ば無意識に歌つたものであろう。何もかも失なわれるというフランシスの予言が唯だ一つだけはずれて、白鹿 (自然) だけは自然の子を見捨てることなくエミリーのもとへ再び帰つて来た。そしてエミリーの死んだのちも自然は生き残り、おしなべて人間の営みのはかなさを象徴する朽ちゆくリルストン・ホールは白鹿 (自然) にむかつて、「お前はうつろう時の子ではない、とこはるの娘だ」と呼びかけるかのごとくしてこの詩は終る。結局この詩も、劈頭に打鳴らされた正統的信仰の鐘の音を半ば裏切つて汎神論的自然の礼讃で終つてゐる。まことに根強いものである——

The Child is father of the Man;

And I could wish my days to be

Bound each to each by natural piety

(終)